

外国語教育におけることわざ —韓国語教育と日本語教育の非対称性—

鄭 芝 淑

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

1. ことわざミニマム (Paremiological Minimum)

最近、伝統的価値観が衰退し新しい価値観が台頭して行く大きな流れの中で、伝統的価値の担い手としてのことわざもまた急速に色あせつつあると言われている。特に、若い世代のことわざに対する無関心が指摘されている。しかしその一方、ことわざ研究の分野では、ことわざが文化を理解する上で重要な役割を担っていることが主張されている。ことわざ研究の世界的権威 Wolfgang Mieder は、それぞれの文化のことわざのうち最もよく知られ、最もよく用いられる基本的なことわざ群を「ことわざミニマム」と名づけ、円滑なコミュニケーションのために最低限知らなければならないことわざ群であるとして、その言語文化における「文化リテラシー」(cultural literacy)の一環として位置づけた。それ以来、様々な文化の「ことわざミニマム」の抽出が試みられている。「ことわざミニマム」はロシアのことわざ研究家 G. L. Permiakov の発案によるものであるが、Permiakov の発案の動機は、ロシアで最もよく知られ最も頻繁に使われる基本的なことわざ群を明らかにし、ロシア語を学ぶ外国人学習者に有用な学習素材を提供することであった。したがって、「ことわざミニマム」の意義については今後多様な展開が予想されるが、言語教育、特に外国語教育に対する応用が中心的な意義を持つことは今後とも変わりがないと考えられる。

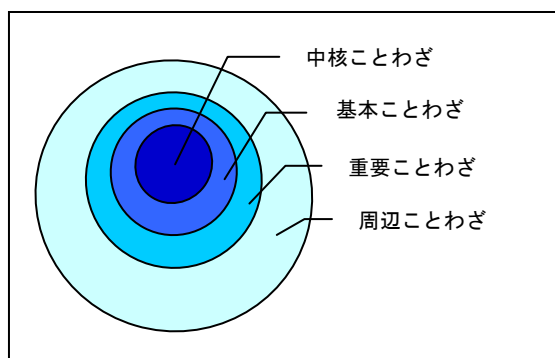
筆者は、かつて鄭(2007)などで「ことわざスペクトル」の概念に基づく「PS リスト」の観点から、韓国語教育においてことわざがどの程度活用されているかを調査したことがある。そして、「ことわざミニマム」は「ことわざスペクトル」の中核部分に相当すると位置づけた。今回、日本語教育におけることわざの使用状況を簡単に調査し、両調査の結果を比較することが本稿の目的である。

2. ことわざスペクトル (Paremiological Spectrum)

ある言語のことわざの総体は、同等の資格を持つことわざの単なる集合ではなく、「重み」の異なることわざの集合であるとする考え方であるが、ここで「重み」というのはことわざの認知度、使用頻度、ことわざらしさ、定着度などによって規定される総合的概念を指

している。言い換えれば、ある言語のことわざの総体は、誰にも知られよく使われる「重み」の非常に大きい中核的なことわざから、ほとんど知られておらず使われることもほとんどない「重み」の非常に小さい周辺的なことわざに至るまで、スペクトル状に分布すると考えるものである。これは図1のような同心円スペクトルで捉えるとわかりやすい。「ことわざミニマム」はこの中核部分にほぼ相当するものと考えられる。

図1：ことわざスペクトル



- 中核ことわざ：ほとんど誰でも知っていて、よく使われることわざ。
- 基本ことわざ：多くの人知っていて、比較的好く使われることわざ。
- 重要ことわざ：ある程度の人知っていて、たまに使われることわざ。
- 周辺ことわざ：ほとんどの人が知らないし、使われることもほとんどないことわざ。

3. PSリスト (PS-List)

ことわざの持つスペクトル的性格を反映したリストを「ことわざスペクトルリスト」略して「PSリスト」と呼ぶ。それを作成する方法としては現在のところことわざ辞典調査による方法が最適であると考えられる。鄭(2007)では日本と韓国で過去20年間に出版された中小規模のことわざ辞典、それぞれ38点と28点を資料として、日本版と韓国版のPSリストVer.2006を作成した。PSリストVer.2006の概要は、日本版では度数43度～1度に分布する12,251件、韓国版では度数28度～1度の8,446件のことわざからなるリストとなっている。

4. 外国語としての韓国語教育とことわざ

鄭(2007)で、外国語としての韓国語教育において教科書や各種能力試験の素材としてことわざがどのように活用されているかを調査し、PSリストの観点からその分析を試みてきたが、その結果を簡単にここに紹介する。なお、「KLPT (世界韓国語認証試験)」の調査は今回新たに行ったものである。

4.1 韓国語教材とことわざ

韓国語教材に関しては、慶熙大学、高麗大学、延世大学の教材を調査した。いずれの教材も6冊で構成されており、1・2は初級教材、3・4は中級教材、5・6は上級教材となっている。それぞれの教材にことわざがどのくらい扱われているか調べた結果は表1に示す通りである。ほとんどが、中級・上級の教材で扱われている。数の上では延世大学校の教科書が最も多くのことわざを取り上げているが、扱いの計画性の観点からすると慶熙大学校の教科書が最もことわざ教育に力を入れている。

表1：韓国語教材に用いられたことわざ件数

教材	異なり件数	延べ件数
慶熙大学校	67	77
高麗大学校	53	55
延世大学校	114	175
合計	171	307

- ① 慶熙大学校国際教育院編『韓国語初級・中級・高級』慶熙大学校出版局，2000-2003年
- ② 高麗大学校韓国語文化研修部編『韓国語1～6』高大民族文化研究院，1992-2003年
- ③ 延世大学校韓国語学堂編『韓国語1～6』延世大学校出版部，1992-2003年

4.2 韓国語の能力試験とことわざ

現在、韓国語の能力試験としては、世界的に行われる「韓国語能力試験」、「KLPT（世界韓国語認証試験）」、主に日本人学習者を対象として行われる「ハングル能力検定試験」の3種の能力試験が行われている。いずれの試験においても、出題素材としてことわざがかなり積極的に活用されている。

4.2.1 「韓国語能力試験」

「韓国語能力試験」では評価基準の一部としてことわざに関して次のように規定している。¹⁾

4級：よく使われる慣用語とことわざを理解し、正しく使うことができる。

5級：一般的に使われる慣用語とことわざを理解し、正しく使うことができる。

6級：複雑な意味を持っている慣用語とことわざを理解し、正しく使うことができる。

第2回から第8回までの試験に出されたことわざの件数は次の表2の通りである。

表 2 : 「韓国語能力試験」に出題されたことわざ件数

	1級	2級	3級	4級	5級	6級	合計
第2回	0	0	4	7	3	12	26
第3回	0	0	4	8	13	4	29
第4回	0	0	0	3	5	4	12
第5回	0	0	0	6	9	9	24
第6回	0	0	0	11	0	7	18
第7回	0	0	1	1	2	6	10
第8回	0	0	0	8	9	7	24
計	0	0	9	44	41	49	143

試験回ごとにばらつきはあるが、平均して毎回20件程度が出されている。問題形式はさまざまなのが試みられていて、中には問題文の中にたまたまことわざが含まれているのに過ぎないものもいくつかある。しかし、大多数はことわざそのものの知識があるかどうかを問う問題になっている。かつては3級でもことわざが出されていたが、最近では評価基準に規定されている通り、4級以上の出題となっているようである。

4.2.2 「KLPT(世界韓国語認証試験)」

KLPT(世界韓国語認証試験)では、出題・評価基準に特にことわざに関する規定は特にないようである。第4回から第10回までに出されたことわざの件数は表3に示す通りである。

表 3 : 「KLPT」に出題されたことわざ件数

	件数		件数
第4回	6	第8回	11
第5回	6	第9回	15
第6回	10	第10回	10
第7回	11	計	69

この試験はTOEFLなどと同じように級別に問題を分けない出題方式であり問題数が他の2つの試験に比べて少ないため、出題されることわざの数も少ないのであるが、それでも毎回平均10件くらいのことわざが出されている。問題形式は「韓国語能力試験」ほど多様ではない。

4.2.3 「ハングル能力検定試験」

「ハングル能力検定試験」では3級以上のレベルでことわざが出題素材となることを次の

ように出題基準に明記している。²⁾

- 3級：単語の範囲にとどまらず、連語など組み合わせとして用いられる表現や、使用頻度の高い慣用句、ことわざなども理解し、使用することが可能である。
- 準2級：数多くの慣用句に加えて、比較的容易なことわざなどについても理解し、使用することができる。
- 2級：連語、慣用句はもちろん、ことわざや頻度の高い四字熟語についても理解し、使用できる。
- 1級：連語や慣用句、四字熟語やことわざについても豊富な知識と運用力を持ち合わせており、豊かな表現が可能である。

そして、特筆すべきことは、第26回以降の出題基準の中で「レベル目安」の一部として準2級に28件、2級に91件のリストを公表している点である。能力試験の出題範囲の一部としてことわざのリストを公表することは、ことわざの学習を奨励する最も効果的な方法であると考えられるので、注目すべきことである。

第18回から第27回までの「ハングル能力検定試験」に出されたことわざの件数は表4に示す通りである。³⁾ 第18回から第25回までは平均して10件以下の出題であったのが、ことわざリストが公表された第26回から出題件数が倍増しており、ことわざを出題素材として重要視されるようになったことがわかる。

表4：「ハングル能力検定試験」に出題されたことわざの件数

	1級	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級	合計
第18回	6	11	2	0	0	0	0	19
第19回	12	3	0	0	0	0	0	15
第20回	1	2	1	0	0	0	0	4
第22回	2	2	7	0	0	0	0	11
第23回	1	2	2	0	0	0	0	5
第24回	2	3	1	0	0	0	0	6
第25回	4	3	1	1	0	0	0	9
第26回	5	—	10	1	1	0	0	17
第27回	12	—	4	4	0	0	0	20
合計	45	26	28	6	1	0	0	106

問題の形式も「韓国語能力試験」と同様に多様で、ことわざに関する知識を問う趣旨の問題が主流となっている。

以上のように、韓国語教育においては、教材でも能力試験でもことわざがかなり積極的に素材として活用されている。素材として選ばれていることわざをPSリストの観点から調べてみると、大半はPSリストの上位300位ぐらいの重要なことわざの中から選ばれて

いる。しかし、PS リストが非常に低いものもかなりあり、また、上位のことわざのすべてが素材として活用されているわけでももちろんない。韓国語教育関係者も気付いていることであるが、どのことわざを素材として選ぶかということが重要な問題点となっている。その問題の解決には、PS リストのような資料を出発点とする必要があるのではないかと思われる。

5. 外国語としての日本語教育とことわざ

日本語教育におけることわざの扱いについては、2001年度から2007年度まで7年間に行われた「日本語能力試験」にどれほどことわざが素材として用いられているかを調査した。韓国語の能力試験程度の出題状況ではないかと予想したが、結果は予想に大きく反して、次の3件しか見られなかった。2003年度以降はまったく出題されていない。2000年度以前についてもおそらく同様であろうと推測される。

情けは人のためならず (2002年度 ; 2級「読解・文法」)

急がば回れ (2002年度 ; 2級「読解・文法」)

論より証拠 (2001年度 ; 1級「読解・文法」)

出題されたことわざの件数が少ないだけではない。問題の中でのことわざの扱い方も、韓国語の能力試験の場合とはまったく異なる。それぞれの出題様式は次の通りである。

情けは人のためならず

〔問題文〕

日本人に、日本語で話せば分かる、通じると思うのも、もしかしたら幻想かもしれない。たとえば、「情けは人のためならず」ということわざの意味。つねづね人に情けをかけ、親切にしていれば、自分が困った時に誰かが助けてくれる。だからけってして他人のためじゃない。自分のためでもあるんだよというのが今までの解釈だった。

しかしこの頃は違うのだそう。あんまり情けをかけると、それを当てにして怠け者になってしまう。だから情けはかけるな、ということなのだそう。(以下省略)

問1 「情けは人のためならず」という諺の、現在の解釈に合っているのはどれか。

- 1 自分が困っている時は人に甘えた方がいい。人はみんな問題があり、助け合って生きているのだから
- 2 困っている人を見たら助けてあげよう。自分が困ったときに誰かが助けてくれるかもしれないから
- 3 困っている人を見ても助けない方がいい。その人が他人に頼って怠けるようになると困るから
- 4 困っている人を見たら助けてあげよう。その人が後で必ず自分に親切にしてくれるから

問2 「情けは人のためならず」という諺の解釈が変わったのはなぜか。

- 1 怠けて働かない人が少なくなったから
- 2 昔より人を助ける親切な人がふえたから
- 3 日本人でも日本語が通じない人がふえたから
- 4 昔のように助けを必要とする人はいなくなったから

この問題は、一応、「情けは人のためならず」ということわざを素材としているが、問いに答えるためにこのことわざの意味を知っている必要はない。問1はこのことわざの「新解釈」の内容を、問2はその新解釈の生まれた原因を問うものであるが、どちらの問いも問題文を正確に読んで理解すれば解ける問題である。つまり、ことわざを素材にした問題であるが、ことわざの知識を問う問題ではない。

急がば回れ

〔問題文〕

「急がば回れ」ということわざがある。急いでいるのなら回り道をした方がいいという意味であるが、急いでいる時に遠い回り道を選ぶ人はいないだろう。多少の危険があっても近道をしてしまうのが普通ではないか。つまり、これは実際に回り道をしろといっているのではなく、あわてて事故を起こしたりしないように、それだけの余裕を持つということなのだ。

問い 筆者によると、「急がば回れ」は急いでいる時にどのようにした方がよいということか。

- 1 危険があっても近道をした方がいい。
- 2 危険があっても遠い道を選んだ方がいい。
- 3 事故をおこさないように遠い道を選んだ方がいい。
- 4 事故を起こさないように十分余裕を持った方がいい。

この問題も、上と同様、「急がば回れ」ということわざの知識を問う問題ではない。

論より証拠

〔問題文〕

何かを伝える文章は、まずロジカルでなければならない。しかし、ロジックには内容（コンテンツ）がともなわなければならない。論より証拠なのである。論を立てるほうは、頭の中の作業ですむが、コンテンツのほうは、どこからか材料を調べて持ってこなければならない。いいコンテンツに必要なのは、材料となるファクトであり、情報である。そこでどうしても調べるといふ作業が必要になってくる。

この問題では、「論より証拠」ということわざがたまたま問題文の中に含まれているだけで、ことわざそのものについてはまったく問われていない。

以上のように、過去7回の「日本語能力試験」には、ことわざの知識を問う問題は1題も出題されていないということになる。

日本語の教材に関しては、綿密な調査はしていないが、手元にある中・上級の教科書を調べてみた結果、ことわざを積極的に扱っているものは見当たらなかった。日本では教材開発が進んでいるので、ことわざに特化した教材があるかもしれないが、一般の教材に関する限り、ことわざは教育素材としてほとんど活用されていないようである。十分な調査をしたわけではないので個人的な印象に過ぎないけれども、複数の日本語教師から確かに日本で出版されている日本語の教科書にはことわざがほとんど素材として取り上げられていないとのコメントをもらっている。

6. ことわざに対する日韓の温度差

上に見たように、韓国語教育と日本語教育においてことわざが占めている比重には顕著な違いが見られるが、これは、日韓両国のことわざに対する温度差を反映しているのではないかと考えられる。

以前から、日本より韓国の方がことわざがよく使われているのではないかと、よく知られているのではないかと感じていたのであるが、それを客観的に確かめるために、2004年にPSリストを利用した認知度調査を日本と韓国で実施した。日本版と韓国版のPSリストの上位1,500件程度のことわざを5つのレベルに分け、それぞれのレベルから5件ずつことわざを選び、ことわざの前半部を示して後半部を補充するという形式のアンケート調査を行った。その結果は、この表5に示した通りである。認知度指数というのは調査平均正答数で、満点は25点である。

表5：年齢層別認知度指数の日韓比較

区分	Ver. 2004			Ver. 2006		
	日本	韓国	日韓差	日本	韓国	日韓差
中学生	6.24	11.59	-5.35	6.17	8.33	-2.16
高校生	7.45	12.39	-4.94	7.27	8.73	-1.43
大学生	7.66	11.78	-4.12	7.43	8.31	-0.88
～49歳	11.74	14.90	-3.16	11.36	12.77	-1.41
50歳～	15.20	15.27	-0.07	14.65	13.23	+1.42
全体	9.43	13.11	-3.68	9.12	10.16	-1.04

Ver.2004 というのはこの調査で用いたPSリストであるが、その結果を見ると、日本でも韓国でも、年齢層が高くなるほど認知度が高くなっている点は同じであるが、日韓差をみると、50歳以上の高年齢層ではほとんど違いがないが、若年層では韓国の方がかなり高くなっている。

ところが、2004年版PSリストはことわざの異形処理が不十分であったことなどの不備があることが分かったので、修正されたPSリスト Ver.2006に基づいて補正分析した結果が右側の数値である。これによると、日韓差はかなり縮まるが、それでも若年層において認知度に差があることは確かである。

このようなことわざの認知度に見られる日韓差の原因としては様々なことが考えられる。その1つとして、少し意外なことかもしれないが、PCの普及があるのではないかと思われる。韓国ではPCのキーボード入力を練習するソフトとしてことわざが使われることが多いために、韓国の若者は少なくとも表現についてはことわざに接する機会が日本よりも多く、これが認知度の差に現れているのではないかと思われる。

ことわざは、旧世代から新世代へと口頭で伝えられていく部分が大きいと言われている。急速に核家族化が進み、若い世代が老人と接する機会が少なくなったために、日常生活の中でことわざに接する機会も失われていると言われている。韓国でもその傾向は顕著に見られるが、しかし、日本に比べるとまだ子供が成長する過程でお年寄りの話に耳を傾ける機会はかなり多く、それがことわざの認知度に見られる日韓差の背後にあるとも考えられる。

日本語教育においてことわざにほとんど関心が払われていないこと背景には、ことわざが日常の言語生活において用いられることがあまりないという判断があると思われる。ほとんど接することがない表現をわざわざ外国人に教える必要はない、ということではないかと思われる。それはそれで、一つの見識、考え方であると思うが、別な判断、別な見識も可能である。使用頻度と重要度を同一視する必然性は必ずしもないからである。そもそも、ことわざの使用頻度が最近になって急に落ちたというのも単なる印象に過ぎず、綿密な調査に基づいた判断ではない。ことわざは今も昔もあまり変わらず使われているが、ただ、ことわざの使用に適した言語場面に対する関心が薄くなっているだけではないかとも考えられるのである。

ことわざと言えば、古臭い陳腐な表現であると考えられがちである。確かに、今の時代には通用しない歴史的な存在価値しかないことわざもあるが、ことわざに込められた教訓や知恵は今の時代にも通用するものがほとんどであるし、そのような価値観が失われつつあるからこそかえって大切にすべきものもあるとさえ言える。言語教育の素材としてのことわざは古典的文学作品を素材とすることと一脈通じるところがあるのではないかと考えられる。古典の内容が古くなりあまり読まれなくなったからといって、そのことだけで言語教育に占めるその価値が大きく変わるわけではない。ことわざも古典と同じように、あるいはそれ以上に、長年にわたって人々に愛され使われ続けてきた表現である。いわば文化遺産とでもいべき表現を、古臭いという表面的な印象だけで捨ててしまうことが賢明

であるとは思われない。使い捨ての時代を象徴するかのように、次々に流行語が造られては消えていく。そのような泡のような表現にはない重みがことわざにはあることを理解させることは言語教育の重要な目標ではないかと考えられる。

また、ことわざを言語教育素材として利用することについては、国語教育と外国語教育とでは多少事情が異なる面があると考えられる。筆者自身が日本語を習ったときに感じたことであるが、日本語のことわざがよく使われているかどうかには関係なく、ことわざは非常に面白い素材であったということである。ことわざが日本語の表現に対する興味を深めるきっかけになった部分が大きいのである。外国語の学習には長時間の努力が必要である。筆者を含めて少なくとも一部の学習者にとっては、ことわざがそのような努力を続けさせる要因の一つになっていると考えられる。

最後に、最近、ジェロという外国人の演歌歌手が話題になっているが、このような歌手が登場することで、日本人の、特に若い世代の日本人の演歌に対する感覚に大きな影響を及ぼしているのではないかと考えられる。外国語教育を通じてことわざに対する理解と知識を持つことになった外国人に、同じような効果が期待できるのではないだろうか。

注

- 1) KICE編 (2004) pp. 16-20参照。
- 2) ハングル能力検定協会編 (2006) pp. 9-10 参照。
- 3) ただし、第 21 回については問題を入手できなかったため、分析対象から除外した。

参考文献

- Mieder, Wolfgang (1994) *Paremiological Minimum and Cultural Literacy, Wise Words: Essays on the Proverb*. New York:Garland Publishing, pp.297-316.
- Permiakov, Grigorii L'vovich (1989) *On the Question of a Russian Paremiological Minimum, Proverbium*, 6, pp.91-102.
- 鄭芝淑 (2007) 『日本と韓国のことわざの比較研究 —ことわざスペクトルと比較ことわざ学—』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文)
- KICE 編 (2004) 『韓国語能力試験問題 1 級～ 6 級』教育振興研究会
- ハングル能力検定協会編 (2006) 『「ハングル」検定公式ガイド合格トウミ初・中級編』ハングル能力検定協会